



CAJLE Newsletter

No. 37 December 2008

カナダ日本語教育振興会
Canadian Association for Japanese Language Education

P.O. Box 75133
20 Bloor St. East
Toronto, Ontario M4W 1A0, Canada
Email: Cajle.Kaikei@gmail.com
Web: <http://cajle.info>

Editors: Keiko Aoki, Yoko Sugimoto, Shunko Muroya (Chief)

Copyright©CAJLE 2008

目次

| | |
|---|----|
| □ 巻頭言 | |
| □ 2008 年次大会 | |
| CAJLE2008 大会をおえて | 2 |
| 2008 Annual CAJLE Conference in Toronto | 4 |
| □ 2009 年次大会 | |
| 2009 年次大会予告 | 6 |
| 2009 年次大会発表論文募集要項 | 7 |
| □ 特集 | |
| 日本情報お勧めウェブサイト | 8 |
| □ リレー随筆 | |
| 初老 - 有森丈太郎 | 10 |
| □ 国際交流基金トロント情報 | |
| JF・トロント・ライブラリーについて | 11 |
| □ シリーズ - 学校紹介 | |
| ハリエンリー高等学校 (AB) | 12 |
| エリックハンバー高等学校 (BC) | 13 |
| □ CAJLE 活動報告 | |
| 2007 年度年史 | 14 |
| 2008 年次大会報告 | 15 |
| 2008 年度年次総会報告 | 16 |
| 理事会メンバー | 17 |
| Journal CAJLE | 17 |
| CAJLE ウェブサイト | 17 |
| □ 会長のことば | 18 |
| □ にほんごサークルからのお知らせ | 19 |
| □ 編集後記 | 19 |

巻頭言

CAJLE というカナダの日本語教育の取りまとめ役を果たしている機関のニュースレターの巻頭に私のようなものが文章を書くのはおこがましいかぎりなのですが、本ニュースレター編集委員会の代表を仰せつかると自動的に本欄の執筆も担当することになっているとのこと、しばらくおつきあいのほどをお願いします。

私の名刺には Japanese Language Education Advisor という何やらいかめしい肩書きが印刷してある。実を言うとこの肩書きを名乗るのは 93～94 年のオーストラリア・ニューサウスウェールズ州、02～05 年のオーストラリア・ビクトリア州、そして今回のカナダで三回目になる。この

「日本語教育アドバイザー」というのは何かずいぶんと偉そうに聞こえるのではないかというのが私自身の語感で、あまりおおぴらに名乗る気がしない肩書きだ。仕事の内容は、要するに私の力の及ぶ範囲で日本語を教えている先生方をいろいろな形で支援するということで、日本語教育支援便利屋と名乗るほうがずっと実態に近い。

この日本語教育支援便利屋、日本語教育に携わってはいるものの、実際に教室で生徒や学生に日本語を教えることはない。教師冥利というのは教えている学習者の力が向上していくの見たときに強く実感するものだろうが、私の場合は教室で授業をしなくなってから 8 年

ちかくたつので、時として「一体、自分は何をやっているのかなあ」と思うこともある。

だが、幸いなことに職業がら日本語の先生方とお会いしたり教室を訪問させていただいたりする機会には恵まれている。カナダでは大学、高校、日本語学校、そして若干数の小中学校などの教育機関で日本語が教えられており、私はこれまで学会や研修会、学校訪問などを通じてカナダ各地で日本語教育の最前線に立っておられる先生方と接する機会を持つことができた。そういう折にとっても心強く思うのは、日本語教育に対して情熱をもち精力的かつ献身的に教えている先生方が数多くいらっしゃるということだ。カナダの日本語教育はこうした先生方の日々のたゆまぬ努力によって支えられているといっても過言ではない。

いきなり話が上段になるが、日本語を教えるものにとっての目的とは何だろう。学習者には学習者それぞれ

の日本語を学習する目的があるように、日本語を教えるものの目的も多様であっていい。私自身なぜ自分が日本語教育に携わっているのかを考えてみると、その理由はいくつか指を折って数えあげることができる。しかし、その根底にあるのは、日本を愛する気持ち、そして、できるだけ多くの人に自分の愛する日本のことを理解し好きになってもらいたいと願う気持ちである。

私が各地で熱心に日本語教育に取り組んでおられる先生方とお会いして感じるのは、こうした先生方の日々の活動の原動力となっているものが、私の場合と同じように日本を愛し日本という国を理解し好きになってもらいたいと願う気持ちではないかということだ。そのことに心地よい連帯感を感じるのは私の思い過ぎだろうか。

室屋春光(ニュースレター編集代表)

2008 年次大会

CAJLE 2008 大会をおえて

CAJLE 2008 大会委員長 小室リー郁子

いつになったら夏らしい日差しが照りつけるのだろう……そう思っているうちに今年も年次大会を迎えることとなりました。今年のトロントは雨が多く肌寒い日も少なくありませんでしたが、大会開催中はまずまずの天候にも恵まれました。

創立 20 周年を迎える記念すべき大会は、CAJLE(カナダ日本語教育振興会)が産声を上げたトロントにおいて 8 月 15 日(金)から三日間にわたり開催されました。ちょうど今年も日加修好 80 周年の年でもあり、その記念行事の一つとして登録されたことで、より広く CAJLE のことを知っていただく好機ともなりました。

普段の CAJLE の大会の良さをそのまま維持しつつ、20 周年の記念大会の名にふさわしい三日間にしようと、水面下での準備は昨年のも年次大会終了後すぐに開始されました。今回は大会実行委員長という形での代表者は置かず、実行委員会の中にさらに小さなチームを形成し、必要な時は全員で頭をひねり、任せられることはそれぞれの担当者に仕事を一任する、というやり方で進めました。その中心メンバーをほかの実行委員が支え、実行委員を理事が支えるというサポート体制がうまく機能したおかげでしょうか、途中さまざまな障壁もありまし

たが、それらもなんとか乗り越えることができました。

CAJLE2008 は、大江都会長の挨拶に続き、来賓の方々からのご挨拶で幕を開けました。在トロント日本国総領事館からは川上公一総領事に、国際交流基金トロント日本文化センターからは鈴木雅之所長にご挨拶をいただき、続いて CAJLE 創立者であり初代会長を十年間務められた中島和子名誉会長にご祝辞を賜りました。

開会式終了後、今大会のテーマである「変わりゆく日本語と日本語教育の今」と題し、国際交流基金日本語事業部長・日本語グループ長の嘉数勝美氏による基調講演が行われました。学習者、学習環境、そして日本語そのものが急速に多様化していく中で日本語教育はどう対応していけばいいのかということについて、現場の現状に加え行政サイドの視点も含めてお話いただきました。

初日の午後には教師研修が二つありました。一つ目は、Illinois State University において人類学が専門の James Stanlaw 先生による“Japanese English”についてのお話でした。Stanlaw 先生ご自身が、一日本語学習者として疑問に思ったり不思議だと感じたりなされたことを、豊富な実例とともに紹介されました。日本人や現場の教

師が目の敵にしやすい和製英語やカタカナ語に好意的な先生のお話を伺って、これまでと違った見方で日本の街を歩いてみようと思われた方も少なくないと思います。二つ目の教師研修は、この CAJLE の大会には何度も足を運んでくださっている早稲田大学大学院日本語教育研究科教授の川口義一先生によるものでした。待遇表現は、敬語が提出される初級後半を待たずに初級の初期の段階からでも指導ができること、ただそれには「文脈化」が重要な役割を担っていることを、具体例を紹介しながらわかりやすくお話くださいました。

初日はこのあと大会プログラムとは別に、国際交流基金トロント日本文化センター、国際表現言語学会との共催で、平田オリザ氏による講演がありました。

大会二日目午前中は、二会場において研究論文発表がありました。発表者はカナダからだけでなく、アメリカ、日本、香港、韓国から集まり、さまざまなテーマについての論文発表のあと活発な質疑応答が続きました。

午後はこの大会の柱であるパネル・ディスカッション I が行われました。パネリストとして、嘉数勝美氏(上掲)、川口義一先生(上掲)、大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻の教授でおられる鈴木睦先生、そして国際交流基金派遣アルバータ州教育省日本語教育アドバイザーの室屋春光先生をお招きし、大会テーマにそったディスカッションがくりひろげられました。変わりゆく日本語に振り回されることなく、また単に拒絶反応を示すのでもなく、その変化に敏感であり、時には寛容であることが必要であるというメッセージは、ややもすると「今」の日本語に取り残されがちな、日本の外にいる教師たちにとって励ましの言葉にも聞こえました。言葉としての「美しさ」と「文法的な正しさ」、そして、いろいろなレベルでの「適切さ」、この三つを混同することなく、教師一人一人が自分の語感を磨いていくことが大切なのだと痛感しました。

このあとの年次総会では、会計報告と予算案の提出、各役員からの活動報告、理事改選等が速やかに行われ、理事改選においては、現理事9名が継続、6名が辞任、新たに6名の理事が出席者全員により承認されて、15名の理事が決定しました。

総会終了後、年次大会会場において懇親会が開催されました。今回は記念大会でもあり、CAJLE の活動を知っていただく機会になればとトロントの日系企業の

方々をご招待し、盛大に行われました。日本語を学ぶ学習者たちが、将来のキャリアとして日系企業を考えるケースも少なくありません。そういった意味で、教育の現場にいる私たちが企業の方とお話できる機会を設けることは意義深いと考えた次第です。懇親会では、文字どおりの「懇親」の要素だけでなく、講師として来てくださった川口義一先生によるマトリョーシカ演奏や出席者参加の出し物などあり、皆夜が更けるのを忘れて楽しみました。

最終日三日目、午前中は前日に引き続き研究論文発表が、午後には今大会二つ目のパネル・ディスカッションが行われました。このパネル・ディスカッション II は「日本語コミュニケーション教育における演劇の持つ可能性を探る」と題し、まずビクトリア大学太平洋アジア学科日本研究准教授でおられる野呂博子先生の講演、ディスカッションへの導入から始まりました。国際表現言語学会への発起人でおられる先生自ら、演劇がどう日本語教育に役立つのかについてわかりやすく概説されました。それに続き、岐阜大学留学生センターの橋本慎吾先生から演劇的アプローチを使った例が紹介され、その中で音声教育における演劇使用の可能性について述べられました。パネリストの最後は劇作家・演出家・大阪大学コミュニケーションデザインセンター教授でおられる平田オリザ先生が務められました。「冗長率」という聞き慣れない言葉を紹介され、冗長率が低すぎても高すぎても人の話はわかりにくくなる、そのさじ加減がわかっているコントロールできるのがプロの演劇人、その彼らだから話し言葉の教育に貢献できることがある、とおっしゃっていました。三氏のお話を聞きながら、「演劇」という敷居の高い言い方をしなければ、すでに私たちが教室活動として行っているロールプレイやスキット作り、シャドーイングなども演劇に通じるものがあるのだということを再認識しました。

以上、三日間のプログラムを概観してみましたが、大会全日程をとおしての延べ参加者は 155 人に及び、アンケートの回答でも、テーマ、発表者(講師含む)ともによかったという声が多く、「20周年にふさわしい」内容だったとのコメントには胸が熱くなりました。恒例の Nihongo Circle さんによる展示販売会場には、今回はくろしお出版(東京)もテーブルを並べられていて、特設会場は休憩時間になると参加者の方で賑わっていました。

CAJLE 年次大会にはつきもののオプションツアーは、大会終了後の翌日に予定されていました。ナイアガラへの日帰りツアーで、この日は暑いぐらいのお天気でした。最後の最後に一雨のおまけもついて、ナイアガラ瀑布、ワイナリー、ナイアガラ・オン・ザ・レイクの散策……と参加者は三日間の「勉強」の疲れを十二分に癒すことができたと思います。

末筆となりましたが、この大会の開催に向けてご尽力いただいた方々のお名前を記します。国際交流基金トロント日本文化センターのスタッフの皆様にはいろいろと助けていただきました。中でも鈴木雅之所長と齋藤典子さんには、企画の段階から大会開催中の細々したことに至るまで大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。商工会の伊東議員専務理事には日系企業の方を懇親会にご招待するにあたり、多大なご協力を賜りました。ありがとうございました。在トロント日本国総領事館と国際交流基金トロント日本文化センターからは懇親

会への援助もいただきました。本当にありがとうございました。

大会実行委員の西島さんは昨年の大会を通して培われたノウハウを生かして、右も左もわからないメンバーを率いてくださいました。会計担当の竹井さん、高崎さん、杉本さん、研究論文発表担当の下條さん、チャウさん、書記の清水さん、参加理事として前日から来てくださったラムさん、そして私たち全体をまとめてくださった大江会長、お疲れ様でした。そのほか、理事ではなく会員またはボランティアとして大会前から大会開催中に至るまでお手伝いいただいた、中尾さん、有森さん、鬼沢さん、チュアンさん、伊東さん、どうもありがとうございました。

会員の皆さん、また来年どこかでお目にかかりましょう。その日までどうかお元気で。

2008 Annual CAJLE Conference in Toronto

Elizabeth Sowka (Carleton University)

As language teachers we spend most of our working hours with people who are less knowledgeable about the subject we teach: that's the notion of being a 'teacher' or 'instructor'. Our job involves a lot of tedious repetition and – oftentimes - as there are more classes on lower levels, this repetition revolves around basic linguistic concepts. It is, therefore, very comforting to be able to meet other teachers in 'student-free' environment and listen to and discuss the issues we normally don't talk about in our classrooms. As strange as it sounds, it is also 'reassuring' to know that other teachers have problems, too, either in choosing an appropriate textbook or in finding effective methods in explaining くれる and もらう or are looking for an easy way to make students remember the kanji. On the other hand, it is very uplifting to share or just hear about successful ideas of classroom activities. The annual CAJLE Conference is an important forum where teachers of the Japanese language can vent their frustration, share their successes and learn from others.

This year's CAJLE Conference was held in August in

Toronto and The Japan Foundation as always, proved to be the most hospitable of all hosts. We had an opportunity to listen to approximately thirty or so research presentations, panel discussions and special lectures. The individual 発表 were presented simultaneously in two rooms and at times it was difficult to decide which presentation to attend. I'm sure it was due to volume and time constraint that each presentation was allotted only twenty minutes followed by few more minutes for questions and answers.

Despite an easy access to the Internet and TV Japan, which allow us to keep abreast of different developments in Japan, it is still stimulating to listen to special guest speakers arriving straight from Japan and 'bringing' with them fresh ideas in Japanese language education or those important current issues related to the Japanese language itself or to the teaching of it to foreigners (日本語教育 as opposed to 国語). This year's conference theme was: 「変わりゆく日本語と日本語教育の今」. I listened with great attention to the keynote lecture by Kakazu Katsumi sensei from the Japan Foundation and as a learner of

Japanese myself. I was particularly interested in the part on teaching Japanese to foreigners living and working in Japan.

The subject is becoming an important one as the country facing labour shortages started to accept foreigners to ease the problem. The official immigration, however, brings various issues and the language education is only one of them. Japan is not an immigrant country like the States, Canada or Australia which despite many years of immigration experience still have problems with smooth integration of immigrants to the society. Listening to Kakazu-sensei's talk I could not help thinking that Japan as a beginner in this area has a very long way to go. Educating Japanese society to accept foreigners who speak broken Japanese with funny pronunciation may prove more difficult than teaching foreigners the language and the Japanese way of doing things.

Quite enjoyable was the lecture by James Stanlaw sensei from Illinois State University: "Japanese English: Language and Culture Contact". We all know that Japanese is 'polluted' with foreign loanwords, most recently from English, but so are other languages. Japanese, to its credit, uses the loanwords in a very creative way, enriching the language and modern culture. I was captivated by the lecture and decided to find more on the subject by reading the book by Stanlaw-sensei.

The introduction of a new textbook: 「とびら」 was a very good idea for a presentation at the conference. (I do not recall a similar one in the past, but again I have not attended ALL workshops and conferences.) The co-authors, Tsutsui-sensei (University of Washington) and Oka-sensei (The University of Michigan), gave concise yet valuable description of this new and exciting title for intermediate learners. Their presentation was accompanied by Kuroshio Publishers presence and exam copies of the pilot version. I really wish publishers (especially the Japanese ones) or authors attended the conference regularly with their upcoming or already out

publications. This would make the search for new textbooks much easier as for us living overseas (in regard to Japan, of course) or even outside of Toronto or other big city, it is difficult to purchase new Japanese textbooks or teaching resources. Of course, I use online bookstores (including Amazon.co.jp) regularly out of necessity rather than convenience (costly shipping and problems with returns), but I like to peruse the book before I choose to buy it. Hence I appreciate the Nihongo Circle's 'bookstore' presence during the conference very much.

Very worthy of note was a special lecture by Hirata Oriza sensei on "The Development of Modern & Contemporary Theatre in Japan". Hirata-sensei himself is a playwright, artistic director, stage director, president of a theatre company, professor of the Study of Communication and Design... He worked in many countries and received numerous drama and performing arts awards. No wonder he drew a big crowd of Torontonians who - judging from their questions - knew his work and achievements. Hirata-sensei's lecture was presented in celebration of the 80th Anniversary of Diplomatic Relations between Canada and Japan.

If I may, I'd like to mention one more thing: I have been to the CAJLE conference in Toronto a few times and every time I go, I look forward to meeting non-native teachers of Japanese. So far, with no much luck. It seems - for obvious reasons, I guess, that the Japanese is taught mostly by native speakers. That's wonderful, but The Japan Foundation puts a lot of effort into training non-native teachers. (I am a grateful ex-trainee myself.) So - where are they?

Thanks to the absolute dedication of organizers and many volunteers from the CAJLE office and staff from The Japan Foundation, the anniversary conference was a great success. To all organizers and volunteers: we appreciate your time and devotion to the conference. Congratulations on the job well done and sincere THANK YOU!

2009年 年次大会

2009年 年次大会

2009年 年次大会実行委員会

2009年 年次大会は8月15日(土)、16日(日)の2日間、「これからの日本語教育を考える—教師間・教育機関の連携を目指して—」という大会テーマのもと、国際交流基金トロント日本文化センターにて行う予定です。例年通り、研究論文発表、教師研修会、情報交換会、教材展示販売、懇親会など、充実したプログラムを予定しています。

来年度の大会は、あらゆる教育機関の教師たちが連携して、プログラムの充実と学習効果の向上を目指すことを提案します。パネルディスカッションにおいては大会参加者の中からもパネリストを募り、実践的な取り組みを紹介する予定です。皆様、ぜひお問い合わせの上ご参加ください。

<http://www.cajle.info> (詳細については来春アップデートの予定)

お問い合わせ先: 有森丈太郎 jotaro.arimori@utoronto.ca

2009年 年次大会 発表論文募集

2009年 年次大会実行委員会

CAJLE では、「これからの日本語教育を考える—教師間・教育機関の連携を目指して—」をテーマに CAJLE2009年 年次大会を、8月15日(土)~16日(日)、国際交流基金トロント日本文化センターにて行う予定です。本大会では日本語教育関連分野における研究論文発表に加え、教師研修会およびパネルディスカッションなどを計画しています。

発表論文は、日本語学、日本語教育、継承語教育などの理論的考察、実践報告、また教材開発などを扱ったもの、特に大会テーマに沿った発表を歓迎いたします。また共通のテーマに沿ったグループでの発表も受け付けます。発表言語は日本語・英語のどちらも可、発表時間は質疑応答を含め30分とします。

なお、大会終了後に発表論文の中から Journal CAJLE vol. 11 への掲載候補を選定し、投稿のご案内をいたします。提出された論文は、査読委員会が審査を行い、採否を決定します。

研究発表をご希望の方は以下のものを電子メールの添付(.pdfまたは.doc)にて下記までお送りください。

- (1) 発表タイトル(日本語と英語)
- (2) 発表論文の要旨(日本語または英語 1 ページ)
- (3) 発表者の氏名(日本語とローマ字)
- (4) 所属機関および役職(日本語と英語)
- (5) 電子メールアドレス、電話番号、および郵便住所

大会発表申し込み先: jotaro.arimori@utoronto.ca (メールタイトルを"CAJLE 2009"で)

締切: 2009年4月9日(必着)

採否通知: 2009年5月9日

CAJLE 規定により発表者は当会会員に限らせていただきます。非会員の方には発表に際し入会手続きをお願いいたします。入会に関する詳細は CAJLE ウェブサイトの入会案内のページをご覧ください。 <http://cajle.info/membership>

CAJLE 2009

CAJLE 2009 Organizing Committee

The 21st CAJLE Annual Conference with the theme “Exploring the Future of Japanese Language Education: Bringing Teachers and Schools Together” will be held in Japan Foundation Toronto from August 15 -16, 2009. Concurrent paper presentations, workshops, a panel discussion and a showcase & sale of Japanese teaching materials are scheduled.

The CAJLE Conference 2009 aims to bring instructors of Japanese at all levels together, to strengthen Japanese language curriculum and to enhance language learning results. Conference participants are invited to share their experience and expertise as panelists in the panel discussion. We would greatly appreciate your support in announcing this conference among your members as we look forward to reaching out to instructors of all levels.

For more information, contact Jotaro Arimori at jotaro.arimori@utoronto.ca
or visit <http://www.cajle.info/> (Further details will be updated in spring 2009)

Call For Papers: CAJLE 2009

CAJLE 2009 Organizing Committee

| | |
|-------------------------------|---|
| Theme: | - Exploring the Future of Japanese Language Education: Bringing Teachers and Schools Together |
| Conference Date: | August 15 and 16, 2009 |
| Conference Venue: | The Japan Foundation Toronto |
| Abstract Submission Deadline: | April 9, 2009 |
| Notification of Acceptance: | May 9, 2009 |

The Canadian Association for Japanese Language Education (CAJLE) is pleased to announce that its 21st Annual Conference will be held at the Japan Foundation in Toronto on August 15 and 16, 2009. This conference will gather together teachers of the Japanese language and academics in related fields from institutions around the world. The conference will consist of paper presentations, panel discussions, and teacher workshops.

We invite submission of abstracts for paper presentations on topics including, but not limited to, Japanese linguistics, Japanese language pedagogy, Japanese as a heritage language, as well as innovative teaching techniques. Submissions related to the conference theme are especially welcome. The allocated time for each paper including questions and discussion will be 30 minutes. We also welcome group submissions on a common theme. Presentations may be given in either Japanese or English.

Please e-mail submissions as an attachment, either in .pdf (Adobe Acrobat) or .doc (Microsoft Word) file formats, with the following information to: jotaro.arimori@utoronto.ca (please specify the subject line as “CAJLE 2009”).

- 1) paper title (in both Japanese and English),
- 2) one-page abstract (in either Japanese or English),
- 3) name(s) of the presenter(s) (in both Japanese and English),
- 4) current affiliation and title (in Japanese and English),
- 5) contact information including e-mail address, phone number, and mailing address.

Authors of a selected number of papers presented at the conference will be invited after the conference to submit their papers for article length publication in Volume 11 of the Journal CAJLE. Those submissions will undergo a separate reviewing process set by the standards of the journal.

Presenters must be members of CAJLE. Membership information is available at: <http://cajle.info/membership>

特集「日本情報お勧めウェブサイト」

CAJLE の会員はカナダ国内だけでなく、米国をはじめとしているいろいろな国にまたがっています。もちろん日本在住者もいますが、それでも日本国外の在住者の割合は圧倒的に高く、そのような日本国外在住者にとってインターネットはかけがえのない日本関係情報の入手先となってきています。本号では、「日本情報お勧めウェブサイト」と題して特集を組み、CAJLE の理事会の皆さんにお願いして日本関係の情報を入手するためによく使っているウェブサイトを推薦してもらいました。会員の皆さんのお役に立てれば幸いです。なお、この特集で紹介された推薦サイトは簡単にリンク先が閲覧できるように CAJLE ウェブサイト (<http://cajle.info>) の「Link」のページにも掲載してあります。

次号には「日本語教育に役に立つお勧めサイト」を特集する予定です。読者の皆さんからの投稿も大歓迎します。「サイト名、URL、サイトの種類、コメント、推薦者」を記入の上、shunko.muroya@gov.ab.ca までお送りください。

◆ 各種ウェブサイト情報

サイト名: YAHOO! Internet Guide(今月の URL)

URL: <http://www.sbcr.jp/yig/url/>

コメント: オンラインの情報を紹介する老舗の月刊誌に掲載された特集サイトリンク。魅力的なテーマや選び抜かれたサイトはまさに一級品、紙媒体とオンラインとの絶妙なバランス感覚は味わい深い。

推薦者: 楊(カルガリー大学)

◆ ニュース一般(政治・経済からサブカルチャーまで)

サイト名: J-Cast ニュース ビジネス&メディアウォッチ

URL: <http://www.j-cast.com/>

コメント: 普通の記事だけでなく、ある話題について、ネット、ブログ、ワイドショーのコメント等の反応を引用した記事も載っています。他にモノウォッチも面白いです。イマドキの日本が分かります。

推薦者: 青木(クィーンズ大学)

サイト名: Japan Times -FYI -

URL: <http://search.japantimes.co.jp/cgi-bin/nn-i-all.html>

コメント: 日本の最近のニュースや現象をより深く知るための背景知識が得られる。週一回更新。学生に役立つ情報もあり。

推薦者: 高崎(クィーンズ大学)

サイト名: The Journal

URL: <http://www.the-journal.jp/index.php>

コメント: 有名フリージャーナリストが共同で運営するオピニオンサイト。新聞のウェブサイトなどとは異なったアングルからニュースを読み解いてくれて興味津々。

推薦者: 室屋(アルバータ州教育省)

◆ 辞書

サイト名: goo 辞書

URL: <http://dictionary.goo.ne.jp/>

コメント: 総合情報サイト goo が提供する辞書サービス。約 25 万語の国語辞書や約 12 万語の英和辞書など複数の辞書を擁し、オンライン辞書のデータもインターフェースも多様化する中、上質で使いやすい優れたものである。

推薦者: 楊

サイト名: 英辞郎 on the Web

URL: <http://www.alc.co.jp/>

コメント: オンライン英和・和英辞書。プロの翻訳家たちが協力して運営しているデータベースで、語彙と例文の多さでは他に比較できるものがありません。通常の辞書の形式ばった記述よりも言語の実態に即した訳語が見つかります。

推薦者: 室屋

サイト名: OneLook Dictionary Search
URL: <http://www.onelook.com/>
コメント: オンライン英英辞書。日本とは関係ないのですが、便利なので紹介します。「12,960,939 words in 973 dictionaries indexed」とあり網羅的。
推薦者: 室屋

◆ インターネット調査/アンケート

サイト名: インターネット調査 gooリサーチ
URL: <http://research.goo.ne.jp/>
コメント: さまざまなアンケート調査の結果が載っています。キーワードで検索することもできます。
推薦者: 青木

サイト名: 聞かせて.net 聞かせて! 1万人アンケート
URL: https://www.kikasete.net/marketer/mk/survey/enq/mk_pastenq_1.php
コメント: 「過去に実施したアンケートリスト」で身近なことに関するアンケートの集計結果を見ることができ、日本語の授業にもいろいろと使えそうです。「次の 10 件」をクリックするとどんどんアンケートが出てきます。情報が新しいのも魅力。
推薦者: 室屋

◆ 動画サイト

サイト名: BIGLOBE ストリーム
URL: <http://broadband.biglobe.ne.jp/index.html>
コメント: ニュース、映画、音楽、ドラマ、バラエティ、スポーツ、マネー、アニメ、ドキュメンタリー、ライフスタイル、趣味、旅行・地域などのカテゴリーに分けられた各種動画を無料でストリーミング配信。
推薦者: 室屋 (注意: このサイトはブラウザが Microsoft Internet Explorer でないと閲覧できないようです。)

サイト名: MySoju.com
URL: <http://www.mysoju.com/>
コメント: オンラインで見られるアジア各国のテレビドラマ(英語字幕付き)のリンク集。日本のドラマ(主に若者向け)もいろいろとあるようで、生の日本語教材として使えるかもしれません。
推薦者: 室屋

◆ 料理

サイト名: 男が作れる超簡単料理
URL: <http://otoko-cooking.com/>
コメント: タイトルの通り、しかも「一人暮らし」だけをターゲットに絞っている。言ってみれば、いかにして手抜きをしながら、健康にしてそこそこの豪華さを演出するかが勝負所。
推薦者: 楊

サイト名: レシピ大百科
URL: <http://www.ajinomoto.co.jp/recipe/>
コメント: 手元に料理本がなくても簡単においしい料理の作り方が探せます。材料・料理ジャンル・調理法などから検索できるようになっているのも便利です。
推薦者: 室屋

新刊紹介 「日本語ドキドキ体験交流活動集 Japanese through Real Activities」

国際交流基金日本語国際センターが海外の大学生や高校生を対象とした短期訪日研修で使用してきた、体験、交流を中心としたコースのための教材。教室の外の様々なリソースを活用し体験の中で日本語を学ぶために、①教室で準備する、②教室の外で行動する、③教室に戻って体験をまとめるという一連の流れを教材化してある。日本で教える方はもちろん、海外において日本文化を紹介するリソースとしても。 ウェブサイト: <http://www.jpff.go.jp/j/publish/japanese/dokidoki/index.html>

リレー随筆

初老

有森丈太郎

帰宅ラッシュは一段落したものの、まだそれなりに込んでいる電車の中、なんとか座ることのできた N 子は文庫本を読みながら家へと向かっていた。女子高生たちが数人でお喋りしている以外は静かな車内だった。小説の世界に思いをめぐらせていた N 子だったが、女子高生の一人がよく通る声で放った「てか、初老って何歳？」という言葉にぐいと現実の世界へと引き戻された。周りに無関心に見えるほかの乗客たちも耳だけは一回り大きくして、その問いに対する答えを待ち構えているのが N 子にはわかった。

さて、みなさんは「初老」と聞いてどれぐらいの年代を思い浮かべるだろうか。この N 子というのは私の友人で、その日帰宅してから「ね、ね、初老って何歳だと思う？」と興奮気味にわざわざ国際電話をかけてきた。私自身はまあ60歳ぐらいだろうかと思ってそう答えたのだが、その女子高生たちの間では40歳ということで落ち着いたらしい。その差、実に20歳である。しかし、それ自体は別に驚くことでもない。平成生まれの成人が存在する今日、昭和生まれと付き合い平成生まれを揶揄する「昭和専」という言葉もあるらしい。このように若さでは切れんばかりの中高生にかかる例え20代でもオヤジ、オバサン扱いされてしまうのである。だから彼女達が初老を40歳だと思ったとしてもそれは仕方が無いことなのだ。

そんなふう思いながら話の続きを聞いていたのだが「それがさ、その女子高生、正解！」という N 子の言葉には私は衝撃を受けた。帰宅して辞書で引き、「40歳の異称」という「初老」の定義にショックを受けた N 子はその余波を私にぶつけてきたわけだが、私も電話を繋いだまま手元の電子辞書で調べると確かにそう書いてあった。この驚きを他の人と分かち合おうと、それからしばらくは自分たちを「初老」だとみなしているであろう両親や、自分たちが「初老」だとは夢にも思っていないであろう友人や知人に、この女子高生の質問をしてまわった。結果は思ったとおりで、最初に N 子が受けた衝撃は人々に伝播していった。

実際は「初老」に関しては「老境に入りかけた年ごろ、老化を自覚するようになる年ごろ」という別の定義も辞書に載っているので、私や周囲の人間の「初老像」はあながち間違いではない。そもそも辞書的な定義がどうであ

れ、誰も、少なくとも私の周りでは、「初老」を本来の「40歳」という意味では使っていなかったのである。

さて、日本語を教えることを生業としているからには言葉の意味や用法を正しく理解しなければと普段からこまめに辞書を引いたりしているが、ゆえに人が本来の用法とは違った使い方をしていると気になったりもする。しかし、この「初老」のようなことがあると辞書的な定義に固執することがどこまで意味のあることかと考えさせられる。コミュニケーションにおいて、ある言葉が話し手と聞き手の間で同じ意味で理解され、使われている限りは問題ないのであり、そこで第三者が「みんなそういう使い方をしているけど、本当は違うんだよ」と言ってみたとこで、せんないことである。そんなことは知識のひけらかしであって「生きもの」としての言葉を見ていないということではないか、と思えるのである。

とは言うものの、辞書に載っている本来の意味と、実際の用法のズレ、というものには日本語教師としては敏感でなければいけないだろう。今年の夏から同僚と中上級の読解教材を作っているのだが、そのために色々な読み物を吟味した。ほとんどがプロの物書きによるものだが、そういったものの中にも本来とは違う意味で言葉が使われている例や、その文脈でのみ解釈が可能な特殊な用例がいくらかあった。学習者は辞書を使って言葉の意味を調べるわけだから、「初老」のように複数の意味が載っている言葉ならともかく、本来の意味しか載っていないようなものであれば、学習者は理解に苦しむだろう。そういった際は教師が辞書の定義と読み物の中で使われている意味のギャップを把握して、それを埋めてやる必要がある。

このような言葉の本来の意味と実際の使われ方が異なる例は、文化庁が毎年発行している「国語に関する世論調査」にも取り上げられている。例えば平成14年度の2200人を対象にした調査では「役不足」の意味を「本人の力量に対して役目が重すぎる」とした人が62.8%と、本来の意味である「本人の力量に対して役目が軽すぎる」とした27.6%をはるかに凌いでいる。他にもこのような例が挙げられているのだが、中には自分の理解が本来の意味とは違っているものもあつたりしてドキリとさせられる。同時に、言い誤りや間違った解釈が一般に受

け入れられ、多数派になっていき、さらには辞書に載るまでにはどのような過程を経るのかと考えると、非常に興味深い。

また、前述の教材作成を通して、もうひとつ面白いと感じたのは、各人が持つ言葉に対する感覚の違いである。同僚とのやり取りで、お互いが作った例文に目を通すと、自分には不自然に感じられるものや、逆に同僚にとっては不自然でも自分にはなんら違和感がないと思われるものが少なからずあった。これは意味の取り違えとかではなく、例えば「公共交通機関」が「発達している」と言えるかどうかという微妙なものだ。また、どうも話が噛み合わないと思っていたら、同じ例文を前に、全く違う場面を想像していた、ということもあった。どちらか一方でも不自然だと感じた例文は排除する方向で作業を進めたが、日本語教師たるもの、言葉に敏感でありつつも、同時に自分の言葉に対する知識や感覚を過信してはいけないということを感じさせられたのである。

などと言いながら、この随筆も日本語教育に携わる方々を相手に「皆さんも初老は 60 ぐらいだと思っているに違いない」という前提のもとに書き出したわけで、本当に痛感したのか、と突っ込まれそうです。私自身が初老を迎えるまでには日本語教師としてそれなりに成長していることを願いつつ、ここで次の方へバトンを渡そうと思います。次回の執筆を快諾してくださったのはニューヨーク州立バッファロー大学の下條光明さんです。現在、年次大会の実行委員その他で一緒にお仕事をさせていただいていますが、その緻密で迅速なお仕事振りにはいつも敬服しています。

執筆者のプロフィール

長崎県佐世保市出身。友達に誘われて岐阜は美濃加茂のボランティア日本語教室に行ったのが人生の分岐点。トロント大学東アジア研究科修士課程修了(日本語学・日本語教育)。イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校客員講師を経て 2007 年より現職。

国際交流基金トロント情報

ジャパン・ファウンデーション・トロント・ライブラリーについて

齋藤典子(ジャパン・ファウンデーション・トロント)

ジャパン・ファウンデーションでは、カナダの人たちに日本のことをより広く、より深く、知っていただくために様々な文化交流事業を行っております。ジャパン・ファウンデーション・トロント(国際交流基金トロント日本文化センター)には、その活動の一つとして、日本の情報を提供するためにライブラリーがあります。

今回は、ジャパン・ファウンデーション・トロント・ライブラリーについてご紹介します。

ライブラリーには、日本に関する英語の本をはじめ、雑誌や音楽 CD、映画の DVD など約 15,000 点を備えており、年間 2 万人以上のカナダの方々にご利用いただいております。また、カナダ各地の日本語教育機関の先生方を含む、機関所属の専門家の方々には、郵送での貸し出しサービスも行なっております。

日本の音楽を集めた CD コーナーや日本映画 DVD コーナーも大変な人気です。最近開設したマンガコーナーは、カナダの若い人たちにとって“マンガ・ワールド”

の入口になるように、スポーツ、料理、歴史など幅広いジャンルのマンガ(英語又は日本語)約 800 冊を揃えています。ライブラリーではできるだけ多くの人に図書館を利用していただくために、レファレンスサービスやインターライブラリーローン、小規模な展覧会などを行っております。現在は「源氏物語千年紀」にちなんだ展覧会を図書館で開催しています。

さて、今回は、新設の「マンガコーナー」について、当ファウンデーションの職員からの生の声をお届けしたいと思います。

既に皆様もご存知の通り、日本のマンガは、北米のアクション中心のコミックと違い、洗練されていたり、ロマンティック、メランコリックなどムードがあったり、象徴的なイメージが組み込まれていたり、細部に凝ったものが多いとのことで、当ファウンデーションの英語を母語とする職員もそのように感じているとのことです。

TM職員のお勧めは、バックにくだらないことが書か

れているなど表現が多彩な「Blue Spring」(青い春・英語版)、「THE WALKING MAN」(歩く人・英語版)だそうです。KS職員はあまり日本のマンガを読んだことはないとのことですが、日本に居たころヒットしていた「NANA」がお勧めで、マンガだけでなく、テレビドラマ、映画などいろいろなメディアがあり、理解しやすいとのこと。AS職員は、食べ物のマンガ「美味しんぼ」と「花より男子」を昔読んでいたそうで、「花より・・・」を読んで、日本の高校生活が想像できて楽しかったとのこと。NC職員は、「ドラえもん」や「サザエさん」はバイリンガル版も出版されているので、英語で読むことが出来て理解しやすいですが、日本語で読む方が絶対面白いとのコメントでした。

日本語でマンガを読む職員にも意見を聞いてみました。NS職員は「イグアナの娘」に自分とは何か、また、家族とは何か描かれていて大変興味深かったとのこと。KY職員は、「サイボーグ 009」と「隣の猫村さん」がお勧めで、特に「サイボーグ 009」はヒューマニスティックな内容で子供心にも考えさせられたそうです。MS所長からは、「『あしたのジョー』、『スラムダンク』、『ドカベン』は人生の大切なことを学ぶ教科書です。自分の子

供にも勧めています。」とのコメントがありました。ご利用の際のご参考になれば幸いです。

日本語教材を調べたり参照したいとき、日本について何か調べたいとき、日本の小説や雑誌を読みたいとき、日本についての情報を英語で入手したいとき、あるいは、マンガを読みながらのんびりしたいとき・・・ぜひお気軽にジャパン・ファウンデーション・トロント・ライブラリーをご利用いただければ幸いです。

開館時間やサービスなどの詳細についてはウェブサイトをご参照いただくか、ライブラリーまで直接ご連絡ください。

ジャパン・ファウンデーション・トロント・ライブラリー
131 Bloor Street West, 2nd Floor of the Colonnade,
Toronto, Ontario

ウェブサイト: www.jftor.org/library
電子メール: library@jftor.org
電話: 416-966-2935

シリーズ - 学校紹介

日本語教師としてほかの学校がどんな様子なのかということに関心がおありの方は多いかと思えます。しかし、学会や研修会などの場以外ではなかなかそのような情報を交換することができる場はありません。この「シリーズ - 学校紹介」ではカナダ各地の学校の先生がたに日本語教育の現場の様子を紹介していただき、それを読者の皆さんと共有する場を提供したいと考えています。

今号ではアルバータ州エドモントンのハリーエンリー高校とブリティッシュコロンビア州バンクーバーのエリックハンバー高校の様子をお伝えします。次号からは大学と日本語学校も紹介していきますのでご期待ください。(編集部)

ハリーエンリー高等学校(アルバータ州エドモントン)

Harry Ainlay High School
ハリーエンリー高等学校
年限: Gr.10-12
生徒数: 2350名
学校所在地: 4350-111St. Edmonton, AB
ウェブサイト: <http://www.ainlay.ca>

Japanese Language and Culture 10-20-30 (3Y)カリキュラムに沿ったレギュラー (REG) プログラムと、そのカリキュラムに国際バカロレア (IB) カリキュラムを統合させた形で運営する IB プログラムの二本立てで1991年に開始された。当初の学習者数は100名程度であったが、ここ数年は約300名の生徒が日本語を学習している。この内日本語のバックグラウンドが初めからある生徒は殆どいないが、ゲーム、漫画、アニメ、Jポップ、ドラマ等に既

当校の日本語プログラムは、アルバータ州教育省の

に強い興味があつて日本語を始めるケースが多いようだ。人種的には中国系カナダ人が約6割、韓国系が1割、インド系が1割、あと2割は白人を含めた様々な人種が混じっている。日系人は1%ほどで、日本語を殆ど知らない場合が多い。今年度のクラス内訳は高1が5クラス(REGx2、IBx3)、高2が3クラス(REGx1、IBx2)、高3が3クラス(REGx1、IBx2)である。当校の第二言語プログラムは全て通年で、毎週68分の授業を3回行っている。

教科書は高1で「おべんとう DELUXE」を使用している。REGには「おべんとう2」と「おべんとう3」をそれぞれ高2と高3で使用。IBには、「おべんとう SUPREME」を高2と高3の前期まで使用し、後期は教師編集の教材で指導している。教師は、日本語ネイティブスピーカー1名、日系カナダ人1名、中国系カナダ人1名の計3名である。

3名の教師が共に努力している点は、生徒のモチベーションを上げること、生徒の学習スタイルに合わせた様々な活動を授業に取り入れること、そして学習に効果的な評価方法を適用することである。このため、教師た

ちはカリキュラム目標と授業活動目標の合致を話し合い、学習ゲーム、歌、アニメ、映画等の効果的な活用法をコラボレートし、日本レストランでの昼食会や春休みの日本旅行、アニメフェスティバルの企画運営を手分けして行っている。特に日本旅行に関しては、昨年からの茨城の高校と交流が始まったことが大きなプラスとなつたし、東京にある某旅行社の親身なサービスにも毎年助けられている。

最後に、昨年からの日本語能力試験がアルバータ大学で受験できるようになり、教育委員会からの資金援助もあつて、当校では高3の希望者がこれに挑戦していることを付け加えたい。今年は42名がレベル4の受験を申請した。試験の時期が当校のプログラムと合わないため、難しい結果が予想されるが、一人でも多くの生徒が合格してくれることを願っている。

フェドロウ 美恵子
ハリーエンリー高等学校
国際言語課主任

エリックハンバー高等学校(ブリティッシュ・コロニア州バンクーバー)

Eric Hamber Secondary School

エリックハンバー高等学校

年限: Gr.8-12

生徒数: 約 1600 名

学校所在地: 5025 Willow St, Vancouver, BC

ウェブサイト: <http://hamber.vsb.bc.ca>

エリックハンバーはバンクーバー市の中心部のやや西側、クイーンエリザベスパークや、シャーナシーという高級住宅街の近くです。1962年に創立された当初はユダヤ人の多い学校だったそうですが、ここ30年ぐらいは中国系の生徒が一番多いです。Grade8から12まで、全校生徒は1600人ぐらいです。外国語プログラムは日本語以外にフランス語、スペイン語、中国語もあります。

ブリティッシュコロニア州で、Pacific Rim Languages Programとして日本語と中国語のgrade 9-12のカリキュラムができたのが1987年、そしてその年にエリックハンバーで、バンクーバーで初めての高校の日本語プログラ

ムが始まりました。

アカデミックな生徒が多い学校なので、伝統的に外国語学部も人気があつたのですが、ここ2、3年は卒業のための必修単位数が減つたり、Provincial Examが任意になったり、On-line コースが増えたりと、生徒数もかなり減ってしまいました。現在は5クラス、100人ぐらいが日本語を勉強しています。教科書はおもにハワイのJunko Lowry 先生が書かれた「生きている日本語」を使っています。

生徒たちの動機はなんといっても日本のポップカルチャー、アニメとマンガです。日本からの留学生もびつくりの博識ぶりです。Jポップやテレビ番組もよく知っているし、コスプレが大好きな女の子たちもいます。たこ焼きやおすしもみんな大好き!こんなポップカルチャーの発信地であるって、日本ってすごいですね。

橋ヶ迫聡子
Eric Hamber Secondary School
Modern Languages Department, Teacher

CAJLE活動報告

2007 年度年史 主な活動と内容 (2007 年 8 月 - 2008 年 8 月)

| | |
|---------------|--|
| 2007 年 | |
| 8 月 21 日-23 日 | <p>2007 年度年次大会(ニューブランズウィック大学)</p> <ul style="list-style-type: none"> - テーマ: 「今の日本語—そしてカナダにおける言語教育の今」 - 大会実行委員長: 西島美智子(ニューブランズウィック大学) 国際交流基金後援 - 研究論文発表会(発表者プログラム順): <ul style="list-style-type: none"> 第 1 日目 <ul style="list-style-type: none"> 研究論文発表 1-1(会場 1) 進行 小室リー郁子(トロント大学): 有森丈太郎(トロント大学)、原田登美(甲南大学)、新屋映子(桜美林大学) 研究論文発表 2-1(会場 2) 進行 楠正子(カリフォルニア州立大学ノースリッジ校): ハウ博美(トロント日本語学校)、高宮優実(パデュー大学大学院)、新野悠子・米本和弘(マギル大学大学院) 研究論文発表 1-2 (会場 1) 進行 下條光明(ニューヨーク州立バッファロー大学): 楠正子(カリフォルニア州立大学ノースリッジ校)、上野純子(ユニオン大学) 研究論文発表 2-2(会場 2) 進行 レベッカ チャウ(ブリティッシュコロンビア大学): 矢吹ソウ典子・アリスン デヴァイン谷村(ヨーク大学)、虎谷紀世子(ヨーク大学) 第 2 日目 <ul style="list-style-type: none"> 研究論文発表 1-3(会場 1) 進行 新屋映子(桜美林大学): 遠藤直子(早稲田大学大学院)、安達真弓(東京大学大学院)、山下暁美(明海大学) 研究論文発表 2-3(会場 2) 進行 レベッカ チャウ(ブリティッシュコロンビア大学): 広瀬研也(キングサワード大学)、高木裕子(実践女子大学)・佐藤綾(大邱韓医科大学)、平畑奈美(早稲田大学大学院・中国帰国者定着促進センター) 研究論文発表 1-4(会場 1) 進行 虎谷紀世子(ヨーク大学): 袴田麻里(静岡大学)、原沢伊都夫(静岡大学) 研究論文発表 2-4(会場 2) 進行 平畑奈美(早稲田大学大学院・中国帰国者定着促進センター): 柴田智子(プリンストン大学)、小室リー郁子(トロント大学)、宇佐美まゆみ(東京外国語大学)。 - 教師研修会(プログラム順): <ul style="list-style-type: none"> 井上史雄(明海大学)「社会言語学と日本語教育」、太田徳夫(ヨーク大学)「カナダにおける日本語遠隔教育」、室屋春光(アルバータ州教育省・国際交流基金派遣)「日本語教育スタンダード及びカナダ版日本語教育振興キットについて」、Joseph Dicks, Paula Kristmanson (University of New Brunswick) 「Innovations in Second Language Teaching in New Brunswick」 - パネルディスカッション: <ul style="list-style-type: none"> 司会: 大江都(マウント・アリソン大学) パネリスト: 井上史雄(明海大学) 宇佐美まゆみ(東京外国語大学) 川口義一(早稲田大学)「今の日本語と日本語教育を考える」 - CAJLE 出版物展示及び即売 |
| 8 月 21 日 | 2007 年度定例総会(Tilley Hall 205): 大江会長により小室リー郁子氏を議長に指名。会員実数 110 名中、委任状 24 通、出席者 11 名で合計 35 名により総会が成立。2006 年度活動報告及び 2007 年度活動予定を発表。2006 年度会計報告、及び 2007 年-2008 年度予算案が提出され承認された。今年は理事改選なし。 |
| 8 月 23 日 | 2007 年度第 1 回理事会(UNB アトリウム): 出席理事が 15 名中 7 名と少なかった為、承認事項は次回に持ち越された。 |
| 8 月 24 日-25 日 | 自由参加によるプリンスエドワード島見学ツアー: 企画・リーダー 大江都 |
| 9 月 15 日 | 2007 年度第二回理事会(オンライン) 9 月より渡並美和氏が理事を辞任、高崎麻由氏が新理事として加わり、会計を担当することになった。2008 年 CAJLE 大会期日は 8 月 15 日から 17 日の 3 日間で、トロント国際交流基金日本文化センターで行われる。大会準備委員代表は西島、小室、大江の三氏となった。ジャーナル CAJLE は、従来の 7 月発行ではなく 12 月発行を目標とすることになった。 |
| 10 月 28 日 | オンタリオ部会勉強会: 「家庭における子供の継承日本語育」鈴木美知子講師 |
| 12 月 12 日 | ニュースレター 35 号発行 編集長 楊曉捷 |
| 2008 年 | |
| 3 月 3 日 | オンタリオ部会勉強会: ワークショップ「話す力をどう伸ばす!」小室リー郁子講師 |
| 3 月 30 日 | オンタリオ部会勉強会: 文法講習会—金谷武洋講師 |
| 7 月 1 日 | ニュースレター 36 号発行 編集長 楊曉捷 |
| 7 月 7 日 | 2007 年度第三回理事会(オンライン): 王伸子、桶谷仁美、清水道子、永瀬治朗、楊曉捷、ライリー洋子諸氏理事辞退。理事メールサーバーの変更。 |

2008 年度年次大会報告

本年度の年次大会は、8月15日より三日間に渡り国際交流基金の援助を得て、国際交流基金トロント日本文化センターにて開催された。本年度の大会参加数は例年に比べ少な気味であったが、カナダ国内からの参加者は前年度より17名も増え41名、日本12名、アメリカ合衆国12名、ホンコン2名、そして、韓国から1名と多彩な参加者であった。大会テーマ「変りゆく日本語と日本語教育の今」の基に例年のごとく研究論文発表、教師研修会、情報交換会、教材展示販売、懇親夕食会(今年はトロント近辺より多数の日本企業関係の方々も参加された)等のプログラムで進行された。又、18日には、オプション・ツアーとしてナイアガラ日帰り小旅行も企画された。大会プログラム詳細は CAJLE ホームページをご参照ください。
<http://www.cajle.info>

尚、年次大会アンケートは、回収数25で下記の結果報告がまとめられた。

1. 全体評価
 - a. とてもよかった 17
 - b. よかった 6
 - c. 無回答 2
2. 参加したセッション
 - a. 基調講演 19
 - b. 研究論文発表 21
 - c. 教師研修 I 19
 - d. 教師研修 II 20
 - e. パネルディスカッション I 19
 - f. 講演、パネルディスカッション II 18
 - g. 教材展示及び即売会 18
 - h. 懇親会 10
 - i. その他 特別講演4
3. よかった点、改善すべき点
 - a. よかった点
 - 最新の日本の教育行政などの日本事情が分かった。
 - 日本語の未来について考えさせられた。
 - 待遇表現の分類について学べた。実用的でよかった。
 - 文法が学べた。
 - 音声学の視点からの具体的な演劇指導例がためになった。
 - 日本語教育と演劇の接点分かった。
 - 人類的な視点を紹介もらった点。刺激的で面白かった。(特別講演)
 - テーマが面白かった。
 - 発表者の実体験が聞けて面白かった。
 - シェドーイング、演劇が面白かった。
 - さまざまな分野について知見を広げることができた。
 - 研究発表とパネルのバランスがよかった。
 - 発表者がよかった。
 - b. 改善すべき点
 - パネルディスカッションは学ぶところが多かったが、ディ
4. 今後の開催地、トピックなどの希望
 - a. 開催地
 - トロントがベスト
 - トロントで毎年。でも、3-4年に一度は他の所。
 - バンクーバー
 - オタワ
 - b. トピック
 - 文化をどう教えるか
 - 子供の日本語、継承語教育
 - 外来語
 - 仮定節:たら、ば、と などの教え方
 - 上級の教授法
5. 大会に関する意見
 - スカッションが漠然としていた。
 - 実際の教え方の実例があると、とても為になる。
 - 時間が長すぎた。
 - 時間が十分ではなかった。
 - 教育的示唆、または議論をもう少し加えてもらいたい。
 - 発表中のスタッフの声がとても気になった。必ず会場外で話してもらいたい。
 - ホワイトボードのペンが薄すぎて見えなかった。
 - ハンドアウトがある場合と、ない場合があったので、各発表のハンドアウトの有無をはっきりしてもらいたい。
 - パネルと研究発表の同時進行は避けられるのだろうか。
 - 懇親会でのゲーム(賞品渡し)が長すぎた。懇親の時間が中断させられた。もっと、多くの人と交流したかった。
 - 会場2では、マイクがなかったのでラベルを備え付けてはどうか。
 - CALJEはカナダの会なので、もう少しカナダ各地からの発表があるといい。
 - 第一会場後方での大会関係者の出入り、話し声が気になった。
 - 第一会場の柱が邪魔になった。
 - 音量が高すぎて、耳が痛くなり、耳栓をつけた。
 - もっとカナダからの発表がほしい。
 - 会場アクセスの情報がとても分かりやすくよかった。
 - 大会に関する案内は英語と日本語両方で作成してもらいたい。大学への報告書に必要。
 - 懇親会は毎年非常に工夫があり、なごやかでよかった。しかし、理事の方々の仕事の量を軽減するためにレストランで行われたほうがいいと思う。
 - デザートつきお弁当がおいしかった。
 - 大会参加費が高すぎる。
 - CAJLE 会員費が高い。
 - 多方面にわたり大変勉強になった。
 - 3日間楽しく参加できた。
 - 20周年にふさわしい講演、発表であった。
 - 実行委員に非常に感謝する。

2008 年度年次総会報告

本年度の年次総会は、2008年8月16日(土曜日午後5時15分~6時15分)に国際交流基金トロント文化センターで行われた。2007年度活動報告及び2008年度活動予定、07年度会計報告及び08年度予算案、07年度理事会決議事項報告及び承認、理事選出等が主な議題であった。年次総会の詳細は下記の通り。

1. 2007 年度活動報告及び 2008 年度活動予定
 - 1.1. 2007 年度年次大会報告及び定例総会報告(清水)
 - 1.1.1. 2007 年度年次大会: ニューブランズウィック大学で8月21日(火)から23日(木)まで開催された。2007 年度大会はテーマを「今の日本語—そしてカナダにおける言語教育の今」とし、変わりつつある日本語について様々な企画で大会が進められた。進行内容は例年通り、1. パネル・ディスカッション、2. 研究論文発表、3. 教師研修会、4. 情報交換会、5. 教材展示即売等であった。
 - 1.1.2. PEI ツアー: 24 日と 25 日には自由参加で PEI ツアーが行われた。
 - 1.1.3. 2007 年度定例総会: 8 月 21 日に定例総会が行われた。詳細はニュースレター35 号を参照。
 - 1.2. 2007 年度活動報告及び 2008 年度活動予定
 - 1.2.1. 発表企画部(下條): 担当は、下條とレベッカチャウの両氏で 11 月初めより活動が開始され翌 4 月 10 日が論文締め切り日となった。審査の結果、論文 25 本中 22 本が採用され、7 月、8 月に発表者との最終連絡を終了した。2008 年度の活動も 2007 年度と同様に進めていきたい。
 - 1.2.2. ジャーナル編集(大江): 本年度は理事の大規模な変更により編集委員の構成も大きく変わった。採用論文が一本という理由から発行日を 12 月にするという提案が 5 月に編集委員会より出されたが、新しく構成された編集委員会で再検討することとなった。ジャーナル編集全般に関する改善策も検討される予定である。
 - 1.2.3. ニュースレター(竹井): ニュースレター35 号は 2007 年 12 月、ニュースレター36号は 2008 年 7 月に発行された。二つの問題点があり、一つ目は理事と著者とのコミュニケーションで、向上性が検討されるべき(07 年度編集長の意見)。二つ目は、ニュースレター35 号の経験を元に、これからは著者からの記事は理事にも送り、そして、著者には再度別便で連絡をとるようにする。
 - 1.2.4. ホームページ(西島): 2007 年と 2008 年に関しては、情報伝達の役割が定着したように思われる。他の学会からのイベントやお知らせの依頼等も受けて活用されてきており、情報提供にも利用されている。今後は、技術面での支障が生じないように気を配ることと、会員同士での情報交換としての活用も期待している。
 - 1.2.5. アトランティック部会(大江): 本年度は特に活動は行われなかった旨、報告があった。
 - 1.2.6. オンタリオ部会(清水): 三回に渡る勉強会等が行われた。
 - 1.2.6.1. 10 月 28 日:トロント日系会館にて、「家庭における子供の継承日本語育て」鈴木美知子講師
 - 1.2.6.2. 3 月 3 日:ワークショップ「話す力をどう伸ばす！」小室リー郁子講師
 - 1.2.6.3. 3 月 30 日:文法講演会、金谷武洋講師
 - 1.2.6.4. この他に、日本語サークルによる教科書展示販売もあった。
2. 2007 年度会計報告及び 2008-2009 年予算案(高崎)

会計報告書を参考にし、2007 年度会計報告及び 08-09 年予算案は承認された。
3. 2007 年度理事会決議事項報告及び承認(議長)
 - 3.1. ジャーナル CAJLE10 号は 8 月ではなく、12 月に発行の予定。
 - 3.2. 日本語教育グローバルネットワークへの正式参加の承認: 2008 年7月に韓国の釜山にて日本語教育国際連帯ネットワーク代表者会議が開催され、大江都がカナダ代表として参加した。会議には、世界9カ国から参加者があり、来年度はオーストラリアのシドニーで開催予定である。CAJLE は、会の一員がカナダ代表として参加する事を承認した。
4. 理事選出(議長)
 - 4.1. 現理事: 現理事9名全員が継続することが承認された。畔上ラム智子、大江都、小室リー郁子、下條光明、杉本陽子、高崎麻由、竹井明美、西島美智子、レベッカチャウ
 - 4.2. 新理事: 新理事に6人の候補があがり、全員新理事として承認された。伊東義員、ウッド弘枝、ハウ博美、有森丈太郎、青木恵子、室屋春光、

理事会メンバーの異動

2008年7月

王伸子、桶谷仁美、清水道子、永瀬治朗、揚暁捷、ライリー洋子諸氏理事辞退。

2008年8月

年次大会後の総会の理事改選にて下記の理事が決定した。

現理事9名が理事継続(畔上ラム智子、大江都、小室リー郁子、下條光明、杉本陽子、高崎麻由、竹井明美、西島美智子、レベッカチャウ)。現理事9名に加え新理事に6名が加わった(伊東義員、ウッド弘枝、ハウ博美、有森丈太郎、青木恵子、室屋春光)。

2008年度 役職、小委員会

会長：大江都

副会長：未決定(1名又、2名次期会長として)

書記：畔上ラム智子、ウッド弘枝、ハウ博美(3名で分担)

会計：高崎麻由、竹井明美、杉本陽子

広報・ニューズレター：室屋春光(チーフ)、杉本陽子、青木恵子

ホームページ：室屋春光

発表、企画：有森丈太郎(チーフ)、レベッカチャウ、下條光明

ジャーナル編集：下條光明(チーフ)、有森丈太郎、大江都、レベッカチャウ

宣伝開発企画：西島美智子、伊東義員、小室リー郁子

2009年大会実行委員会

代表実行委員：有森丈太郎、下條光明、青木恵子

実行委員：室屋春光、伊東義員

会計：竹井明美、高崎麻由

企画、助成金申請、その他補佐：小室リー郁子、杉本陽子

ジャーナル CAJLE / Journal CAJLE

CAJLEの学会誌「ジャーナル CAJLE」では掲載論文を募集しています。日本語学、第二言語習得、バイリンガル教育などに関わる日本語教育に関する理論的・実践的研究を対象とします。ジャーナルの発行は毎年7月、各号の投稿締め切りは1月15日です。

投稿規程の詳細はCAJLEウェブサイト(<http://cajle.info>)の「Publications」のページからダウンロードできます。

The Editors of the Journal CAJLE welcome submissions for publication consideration. The journal publishes papers on theory and/or practice in Japanese language education, related to, but not limited to, Japanese linguistics, second language acquisition, and bilingual education. Each issue is published annually in July, and the submission deadline is January 15.

You can download the submission guidelines on the Publications page of the CAJLE website (<http://cajle.info>).

CAJLE ウェブサイトの URL 変更と模様替え

www.cajle.info

もうお気づきの方もいらっしゃるかと思いますが、08年9月をもってCAJLEのウェブサイトのURLが変更され、同時にサイトのデザインの模様替えも行われました。新しいURLは「www.cajle.info」です。これにともないCAJLE会員拡大を目的としてサイトを日英の二言語化する作業も段階的に実施中です。広報委員会では今後もサイトの内容をより一層充実したものにしていきたいと考えております。CAJLE会員の皆様には定期的にCAJLEウェブサイトをご覧いただきますようお願いする次第です。

CAJLEウェブサイトに関するご意見ご提案などございましたらご遠慮なく shunko.muroya@gov.ab.ca までお寄せください。

これまで長い間CAJLEウェブサイトのウェブマスターを担当され、CAJLEウェブサイトの運営に貢献されてきましたカルガリー大学の楊先生が、08年8月をもってCAJLE理事から退任されました。楊先生にはこの場を借りましてCAJLE理事会より多大なる謝意を表したいと思っております。

会長のことば

CAJLE 会長 大江 都

早や、年の瀬が近づいてまいりました。皆さま、どんな一年をお過ごしでしたでしょうか。地球をぐるりと見回すと、今年もまた様々なことが起きた年でしたね。この秋には、ニューヨークに始まった金融危機が世界中の経済に波紋を及ぼす中、アメリカに新しい大統領が誕生。カナダでもしばし政権を巡って落ち着かない日々が続きましたがやっと平穏を取り戻し、新しい出発点に立ったかのようです。

CAJLE におきましては、今年は創立二十周年の記念すべき年でした。本ニュースレターにも報告がありますとおり、この八月には、CAJLE 発祥の地トロントにおいて、多数の講師、来賓の皆さまをお迎えして「創立二十周年年次大会」が開催されました。初代会長の中島和子先生、そして、日ごろ CAJLE が多大の支援をいただいている国際交流基金の日本語事業部長嘉数勝美氏にもおいでいただき、示唆あるお話を賜りました。日本語教育が世界に広がる今、グローバルな視点を持つことが大事であること、そしてまた「多文化主義」のカナダにおいては「日本語教育を多言語教育のひとつとして見る」姿勢が必要であること、等を改めて学ばせていただきました。カナダを始め、アメリカ、日本そしてさらに遠方の香港、韓国からおいでくださった会員の皆さまと、大会の行事を分かち合えたのは大きな喜びでした。来年は再度トロントで開催の予定ですが、今年とはまた主旨の異なる大会になるとの実行委員会からの報告です。乞うご期待！今年おいでいただけなかった会員の皆さまも、是非ご参加くださるようお待ちしております。

さて、「総会報告」にもありますとおり、今大会を機に理事のメンバーが大きく入れ替わりました。6人の方々

が任を退き、代わりに6人の新メンバーが加わりました。CAJLE のために長い間貢献して下さった旧理事6名の皆様、ありがとうございました。また、新しく理事メンバーとなった皆様、早速に各部署において仕事を開始して下さり心強い限りです。これまでの基盤を元に新理事によって種々の活動(ホームページ、ジャーナル等)が一新されましたが、理事以外の会員の皆さまからのフィードバックも歓迎です。

最後にひとつ、ご報告いたします。ニュースレター36号で述べましたが、この7月に韓国の釜山において「日本語教育学世界大会 ICJLE2008」が開催され、シンポジウムのパネリストとしてお招きを受けました。シンポジウムでは世界各地から集まったパネリストの方々とともに素晴らしい体験をさせていただきましたが、それとは別に、九つの国、地域の代表者による「日本語教育グローバルネットワーク代表者会議」が開催されました。その会議において、CAJLE はカナダを代表する正式な参加団体となる資格を認定され、その後 CAJLE2008 総会での決議を経て、このたび正式に「日本語教育グローバルネットワーク」の一員となりました。世界大会への参加、他地域との情報交換などの基盤ができた次第です。ちなみに ICJLE2009 大会は、来年7月にオーストラリアのシドニーで開催される予定です。

<http://jsaa-icjle2009.arts.unsw.edu.au/en/index.html>

それでは、学期末、年末とあわただしい毎日が続くことと思いますが、皆さまお風邪など引かれませぬように。一足早く冬景色となったカナダ東部から、新しい年のご健康とご活躍をお祈りいたしております。

《CAJLE 会員規定》 CAJLE(カナダ日本語教育振興会)は、カナダにおける日本語教育の発展と向上を目指す非営利組織です。日本語教育に関心のある方ならどなたでも会員として登録することができます。

- 会費年度: 連絡先がカナダの方...CAD \$ 40.00、アメリカおよび中南米在住の方...US \$ 40.00、上記以外の国・地域に在住の方...US \$ 60.00 (郵送の場合は小切手または money order で)
- 特典: 会員には、ジャーナル CAJLE (年1回発行)及びニュースレター(年2回発行)を無料で配付します。また、年次大会、勉強会、その他の催しの参加費割引の特典があります。
- 入会のお申し込み: 入会ご希望の方は、CAJLE ホームページにて申し込み用紙をダウンロードして必要事項をご記入の上、会費を同封して下記の宛先に郵送して下さい。

Canadian Association for Japanese Language Education(CAJLE)

P.O. Box 75133, 20 Bloor St. East, Toronto, Ontario M4W 1A0, CANADA

- 連絡先の変更: 住所・電話・電子メール等の変更があった場合には事務局までお知らせください。
- お問い合わせ: Cajle.Kaikei@gmail.com

にほんごサークルから「献本」のお知らせ

日ごろより、にほんごサークルをご愛顧いただきまして、ありがとうございます。

皆様へ耳寄りなお知らせです。日本語教科書「上級へのとびら」が2009年7月にくろしお出版より出版予定です。弊社は、カナダ国内での販売を担当させていただくことになりました。それに先立ち、くろしお出版の全面的ご協力のもと、試用版「上級へのとびら」の献本を実施しております。以下の条件に当てはまる機関の方々はずぜひご連絡ください。

献本条件:

- 対象機関: カナダ国内の大学、高校、日本語学校、生涯学習日本語クラス、その他
- 対象申請者: 機関でのプログラム責任者(CAJLE 会員を優先)
- 献本数: 各機関へ1冊のみの献本(2冊目からは有料)
- 受付期間: 2009年2月28日受付締め切り(ただし、期日前に予定数に満ちた時点で締め切りとさせていただきます)

プロモーション用DVDを無料贈呈: 個人で日本語を教えていらっしゃる先生方、日本語教育にご興味をお持ちの方に贈呈いたします。

上記詳細に関しましては、にほんごサークル・トロントオフィス杉本まで直接お問い合わせください。

電話: 416-961-5510 Fax: 416-961-8316 e-mail: ysugi@sympatico.ca

今後とも、にほんごサークルをよろしく願います。

編集後記

●ひょんなことからこのたびニュースレター・広報に任命されました。CAJLEには長い間お世話になっており、会員になったのは92年です。その後幽霊会員時代を経て、98年から再び会費を払って(えっ?)会員に返り咲き。今まで自分自身遠いところに住んでいたものですから、会員同士をつなぐニュースレターの役目は大変重く感じております。ご感想・ご意見・リクエストなど、ぜひぜひお寄せください。お待ちしております! 安袁岐@金具洲頓 ●ご寄稿くださいました皆様、ありがとうございます。新編成となった編集委員ですが、私だけが留任(留年じゃなくて良かった)です。今回の編集作業で一番の難関は「変酋長」から編集後記の名前は皆「当て字」で書きましようと言われたことです。頭の回りが遅くて鈍い私には厄介ごと。しかも「無露野」さんも「安袁岐」さんも何と気の利いていること。新「変酋長」からのお達しですから「No」とは言えず、プレッシャーに押し潰され、毎晩漢字にうなされ熱が出そうでした。「無露野」さんにアドバイスを頼みやっと完成しました。いかがでしょうか。ジ

ヤ〜ン”素妓素@都倫都”★来年もよろしく★ ●安袁岐さん、素妓素さんと私の3人がニュースレターの編集の仕事に仰せつかったのが8月の年次大会後の理事会、9月に入って編集作業に着手、それぞれ本業の片手間で仕事なので12月中旬に会員の皆様のお手元にお届けできるのかなという不安もあったが、まずまず順調に発行にこぎつけたのはご同慶の至り。編集担当者というのは締め切りまでに原稿を出してもらうのに大いに苦労するものという先入観を持っていたのだが、豈図らんや、この37号の原稿はほとんどが締め切りまでにそろってしまった。根がずぼらな私は執筆担当各位に敬意を表して脱帽。変酋長 無露野@江戸門頓

投稿のお願い: CAJLE ニュースレター編集部ではCAJLE会員の皆様からの投稿を歓迎します。小論、エッセイ、ご意見、耳寄り情報など、お気軽に編集部までお寄せください。 shunko.muroya@gov.ab.ca